

醍醐寺三宝院庭園 3 —旧排水施設の在りし日の姿—

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

はじめに 三宝院園池の排水施設は、改修以前の園池西端に設けられた石とコンクリートで造られた幅0.4mの溝と、水面高を調整するための板を嵌める溝が刻まれた水門石が立てられていました。ちなみに、園池への給水は東土塀の下から引き込まれ、側溝を伝って2つの滝口からもたらされています。藤戸石の前面や各島々を循環した池水は、やがて庭園西端の排水溝へと至り、西土塀下から敷地外へと排出されます。この溝の手前に、孔が開けられた用途不明の木柱が水面から0.2m程度頭を出していました。平成16年度にこの用途を明らかにするための調査を行なったところ、古い時期の排水施設が地中に遺されていることがわかりました。

旧排水施設の構造 池底に敷かれていた栗石などを除去し、モルタル塗りの水槽、階段状積み石、2本の支柱、木樋、木栓を確認しました。モルタル水槽は南北約0.8m、東西約1.1m、深さ約0.5mの馬蹄形です。東壁はなく、その代わりに水槽底から幅0.2～0.3mの石を、高さ約0.2mに階段状に2段積み上げていました。これは集水し易くするための工夫とみられます。支柱は水槽南・北壁に塗り込められており、横木を通していた孔が水槽底に据えられた東



写真1 旧排水施設と改修以前の排水溝（北東から）

西方向の木樋の孔と一直線に並ぶ位置に据え付けられていました。木樋には東端から約0.5mのところに直径約7cmの孔が開けられ、先端を三角錐に加工した木栓がはめ込まれた状態で見つかりました(写真1・図1)。

さらに調査を進めたところ、水槽壁面は当初石が積み上げられていたことや、木樋の東端が階段状積み石直下にあり板で蓋がされて

いたこと、その蓋を外すと木樋東側から続く素掘り溝からの水を受ける構造になっていたことなどが明らかとなりました。

平成17年度の調査では、現排水溝直下に土管が通っており、木樋がその土管につなげられていたことを確認しました(写真2・図2)。

各部材の概要 平成18年度に旧排水施設の機能回復と復元を目指すとともに、木樋などの保存処



写真2 木樋とつながられた土管（東から）

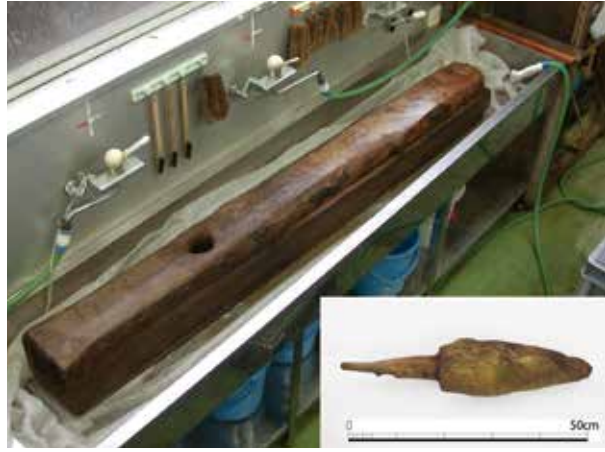


写真3 取り上げて洗浄中の木樋と木栓（右下）

理を行なうため各部材の取り上げ作業を行ないました。木樋は4枚の板材を組み合わせたもので、長さ2.1m、幅0.2m、高さ0.2m、内法は0.12m四方です。布目文を持つ丸釘で打ち付けられた天板と底板には、木材加工時に付けられた数条の墨入れ痕が残っていました。支柱の上半部は断面を隅丸方形になるように加工し、横木を通す長方形の孔を開けています。下部は樹皮を剥いだ丸太の状態でした。材質は部位によって使い分けられており、木樋が松、支柱・蓋が檜、木栓が杉を使用していました（写真3）。

遺構の造られた時期 詳細な年代については2枚の写真がヒントになりました。昭和57年の庭園整

備時に撮影された写真では、モルタル水槽の一部、南北両支柱、木栓、階段状積み石が確認できます。遡ること昭和8年に発刊された『京都美術大観』の写真では、支柱や木栓上部が水面上に完存した形で写っていることを確認できます。腐食の加減から、昭和8年当時に撮影された施設そのものの可能性が高そうです。これらの木材等は近代以降のものですが、木樋を使った排水施設は奈良時代からあり、京都市内の類例では金閣寺安民沢池尻で発見された鎌倉時代の木樋があります。三宝院にも同様の施設が設置されていた可能性は十分に考えられますが、推定の域を出ないところが残念でなりません。

おわりに 園池のある庭園にと

って、給排水施設は重要な施設です。給水口は滝石組などの様に人の目を楽しませる装置として華やか且つ重厚な意匠で造られます。一方、排水口は庭園の片隅に小さくまとめて造られています。排水施設は池の水位を調整する機能を持っていることから、庭園の景観に大きく関わる施設であるにも関わらず、意外に目立たない存在です。排水用の溝はまだ目視可能ですが、水面下に本体がある木樋は知る人ぞ知る施設で、庭園の影の立役者ともいえるのではないのでしょうか。

この旧排水施設は、調査成果と昭和8年の写真を参考に、平成20年度に復元されました。

（近藤奈央）

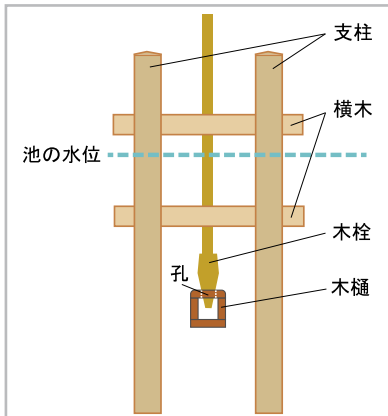


図1 排水施設模式図

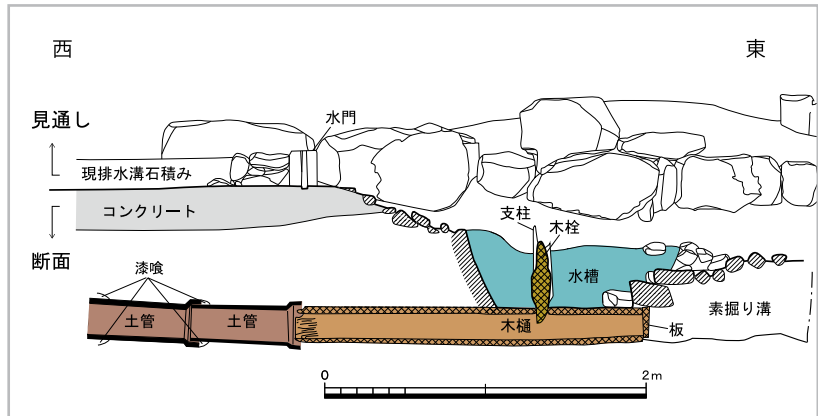


図2 排水施設実測図